

# なんでもある

杉浦 直基

25年前のある日、3号館のレッスン室は怒号に包まれていました。「なんだその演奏は。そんなチャイコフスキーがあるか」その日はオーケストラの入団オーディションで演奏するオーケストラ・スタデイのレッスンを受けていました。日本一有名な交響楽団の首席奏者として活躍なさっていた師匠は、特にオケ・スタには一切の妥協を許さず、ほとんど経験の無い私のヘタクソな演奏を聴いて徐々に怒りが込み上げて来ているようでした。「オーケストラで演奏するためには、指揮者以上に曲を理解してなきやダメなんだ」そしてそれは私がチャイコフスキーのピアノ協奏曲第一楽章にあるソロを吹いた瞬間でした。「おいおい、キミはいつたいどんな勉強をしているんだ」「やった事が無いなら無いなりに考えたらどうだ」「出直して来い。ほら、さつさと出ていけ」

10分ほどでレッスン室を追い出された私は廊下で立ち尽くしていました。「全然ダメだ、もつと勉強しないと。何とかして経験の無さを補わなきゃ。うーん、それならいろんな人の演奏を参考にしながら勉強してみるか。と言うことは：よーし」

入学以来、図書館には割りとよく出入りしていましたが、この日を境に利用の仕方が一変しました。朝一番にオーケストラスコアを数冊借りたらそのまま下に降りてレコードを4時間ほど聴き、5食で手早く昼食を済ませたら再び図書館へ。さらに4時間ほど聴いたら練習室でさらにまくるといいう日々の繰り返しです。しかし勉強しなければいけないオケ・スタは50曲以上。5種類ずつのレコードを聴いたと

して二百五十曲分です。結局、目前に迫ったオーディションまでには一通り聴き終える事が出来ずに見事不合格に。しかし通い続けたおかげで図書館の魅力の虜になってしまいました。よく考えたらこんな楽しい場所はありません。とにかく何でもあるので。舌を噛みそうな名前の作曲家、聞いたことも無いような怪しい題名の曲、何種類ものバージョンの違うスコアとそのレコードの数々。元々クラシック音楽マニアの私はすっかりハマってしまい、アパートにいる時間より長くなってしまいました。おかげで勉強もはかどり、遂には2度目の挑戦でなんとか某交響楽団に無事合格、図書館育ちのプロの音楽家の誕生となつたのです。

卒業後も離れられずに仕事の合間を見ては通い続ける日々が続いていたある日、そんな私がまだ気付いていない図書館の真の魅力を思い知らされる出来事が起きました。楽譜貸し出し受付前で大学院に進んだ同級生と久しぶりに再会したのです。その後、も何故か図書館で頻繁に顔を合わせるようになり、すっかり意気投合。音楽談義に花が咲き、そして…。時は流れて25年後のある日。レッスン室では悩める学生となった私がつておきのアドバイスをしています。「曲のイメージが掴めないって？それなら図書館に行きなさい。CDを何枚も聴くんだよ。それに出版社の違う楽譜も借りてチェックしなさいよ。そうすればそのうち良い事もあるかもよ。え？何のことですか？はーん、まだ知らないな。国立音大の図書館には何だつてあるんだよ。僕はステキな奥さんまで見つけちゃったんだからね」